醫事或問 上

i 55
F
イ−68
Kitasato Memorial Medical Library

浪華書肆

# 醫事或問

東洞吉益先生著

2冊
490.9
I-j-7
1
No. 2138
18.1.55.1
慶應義塾大學醫學部北里圖書
慶應義塾大学医学情報センター
昭和47年7月3日
富士川文庫
1337
Kitasato Memorial Medical Library

醫事或問自序

漢土の書曰病を治するを以て常とし
醫者此漢の附書と醫書此
をのみ見て術見へしいたるを
やう生ておいぬるは醫
術はいへとすらしてほうる
かくしてしるしに道ととて

---

東洞吉益先生著

# 醫事或問

浪華書肆
青藜館
積玉圃
種玉堂

Kitasato Memorial Medical Library

[illegible]されば儒医ともに二つの正
道あり邪の学正道なれハ
人よりなしし申候也すでに邪の
学者ハまよひなく候ゆへにすべて
し仮令人を教るになしすと
常に詠人をまよハするなれ
ら儀にハ尸言道をなし学て



人をまよはすの事を第一つに何を
まそうし病気を本源を用として
まよふ気をまふハ病をも治すべし
一助となし是を病家中道を治
の道と常なるにのしと亀也
三業を清て学中従人の道
暁し弟子をもつて氣をなし祿を

Kitasato Memorial Medical Library

きこゆる由あれは皆尽君は
しつ義残らず弾ひ皆人のかたき
事とそ聞しもれこえ給ふ自序
を翁してやまぬ経月三秋
前発してや此書残志さる人の
皆爾ます東ハ清う人はまゝ益付
ともに聊書写し堂思ひて侍り



乃ゝ堂志るす

明和六己丑仲春

東洞吉益為則頌

醫事或問巻上

一 或問曰醫家のるいいくつといふや

答曰古昔醫者三流あり曰疾醫曰陰陽醫曰仙家醫是なり周禮に所謂疾醫ハ病毒の所在を見定て毒ある方を攻く病毒を取去也諸病疾苦ミ治以扁鵲仲景のとる所是なり陰陽醫とハ不視病之所在唯陰陽五行相生相剋經絡等を以病狀論以陰穩見也手にふれて

治さるゝといへり漢の太倉公是也
仙家醫ハ氣を煉り煉丹を服し人
をして造化に歸らしめんとするに
也人に益もなく害も亦なくし是
葛洪陶弘景孫思邈等是なり又疾醫
ハ万病唯一毒として攻撃して全く得
し其方にて其病毒解さるといふ事
と心ゟ覚る也人病治せらるゝなし湯
醫ハ五臓六腑陰陽五行相生相剋乃

すと書籍みて見覚へ理とりて病を論
しもふ覚ゆる事なく臆見よりてする也人
部てき術ならしやうれあれど實
に病を治さるゝすいつくにこそ陰陽醫ハ
病と治する事あるといへるに陶弘景孫
思邈乃類も仙家乃術と学ひ陰陽
醫ふ仙家の方と混じより是と今の醫
中興の醫と号さる信也いふ扁鵲仲
景れ道絶え後一書一人疾醫の道を論

Kitasato Memorial Medical Library

しるすハ後漢にハ是を根元漢の壱気にありしを
流二千餘年を絶ゆり嗚呼悲哉天下
人民の疾ハ若く医を是れ絶るゝと志ゝ
んとすれハ医ハ古言ハくしかる者へし

一或問曰今此醫方ハくを病治し疾
醫の方ハくも死ハ何をもつて善悪とする
たんや
答曰死生ハ人の評るゝ事にあらズハ天の命
なり故ニ古今の名醫扁鵲の曰越人非



能生死人也此自當生者越人能使之
起耳と扁鵲もいへる人と生死をあらそ
ふハいかんや今の醫にあのてとや醫
者も唯病毒と去て人の疾苦と救ふ
ことを術とさへなるハ其の醫より
見へざるを醫者にあらハ見へさる醫者
もに病ハ此薬にて治さるゝといふをしらず
決定されるもの一度方と處しよてこを
病症の定まてハこを業とし人ハ終に毒去

Kitasato Memorial Medical Library

く病治をも治をする事と志てたる故なり
又学ばざる醫者ハ知らず疑生ずる也人曰く
小方とハ日々に加減をするなり何としてか
病を治をする事とせんや答るに今の方
多く治を為と以ふる文信用せざし是病
毒の動事必休息あり毒の静時ハ用
ひたる薬方にも其方まで治しるやうに
思へども其薬の功にあらぬ毒の静まる
なり故にこれて発する時ハ其方を用ゆ



是とも治せずして方を変なりと見ばく
たゞ是べいかが乃薬おもく治したるにあら
ざる事明らけし又相薬を以ふく用る度
に静まる事あり是ハ薬と用ひ捨とさ
ても志づまるものなりかれとなして
ね薬とおりふを迷ふて初意の薬ハ如
らに毒よあらり瞑眩して病治をこを毒
にあるは是気色にて変なる也人不知意
なる事にありへとも能病の治をすると以て

Kitasato Memorial Medical Library

一 相應の業とせらるへし

或問曰毒を去て病の治すること又癪毒
とのたまへり静にして業を切にあらすといふへきか
醫にあらされハ知りかたし
答曰是實事也誰にても知る事なり
志かれとも是れ其の病みなくハ是を去るへし微
妙なる也人分けかたし能くこれをすこしのへ世に所
謂傷寒時疫痢病抔とて生死十日か廿日に
ころんて大切の病人あり是を當時世上に

上手といふ醫者十人かく十人なから必死
といふならへ大病に顯れしたる時名必死と
云ても死のに病人を治すれハ死となるか
同じ外彼醫者いかん死ぬるもあり生るを
ありとて是生死の知るる瀉療なりと生死を
ゆるより造化乃司にして人の知る所にあら
ずかれ醫者の主所を病也これ病ハ治
ことハ天年治さる人を治するの也
又さ人の生する時ハ何程療しても不復する

又ハ問ていはく或時何ぞあるに醫者十人の
十人ながら手かれ病人ハ生ることハ八九十
日を經ざれハ癒ず復せぬものなりといへん
こハ實事也人ごとに云所ハ遠近京俗人ぬ
病に功者なる醫者のに用ひても醫の云所
を固く守るに是病人ところを日より頭を
毒の在を見立方ときて其病毒と云
に天年治せざる人を三十日ぞ切りには
其よ復せぬ姫路毒と云より知れずと



やれなれども又補剤みて其ふと以不瘳治よ
ては八九十日も經ざれべからず復せるもあり
けれどこの妻ふすに六十日なり又病名病因
と論ずる醫者ありて功者なる事ならずとも
さ人毎よ目前の妻ふなるなり是治定
論にて見立るにあらざる也神治を
せる薬方とこそ病の治するまで用ゆれ
ば日々に方を入或ハ加減するなり是又
く治するをとおもぬ故なり然ども適

治さる半あり是ハ死ぬべきよりて生るゝ時こ
いふ其形り治さる度と知さぬハ方れかハ
るなく気へし支醫者ハ病毒のうかゞひ
せず又薬の方ほと去りされへ病と治さぬ
事あり凡醫者の病と治さるへ薬なり
譬ヘバ大将乃士卒と従へ戦ふがごとしこを士卒
に怨色ありて将の使なりさるには
軍ハ成がたし病と治さるもこを薬に怨
あるべく用ひる事自由ならさるへ病を治



せざるなり
一 或問曰先生を用る薬の設も大なれ共
弁しきことも一たにこを薬方とうへさる事いかん
答曰是病と治さる事れ気に入ざる人
に依りされハ為すへくし病に応じと法け
病因と論さるハかりし臆見也よ十日ともこを
薬方れ効すれ時ち知よ難し故にさらして
方と用るなり扁鵲の如く疾醫を
病毒と見て此毒を此薬にて治さるを

いふ事ハ心学に究定とする世人たとへバ薬の効なきとても病の治するをは薬方とかんがふるあり是ハ内ニ自然と病毒うごき動く事あり動くときハ大ニ瞑眩して病治する事のなり病治したるあとにて是ハ薬方がりにては治せぬ事と知るべきなり又ある病ニ中るある試ミハ唯方と出くれぬ事と自然とく人と惑ハ是の如き也云法者のとる事なり必惑へからバ是と紀さんと思ひて甚



病人の治しやうと思ひし彼云法者をとらへて覚ゆる事又かく実にましていひちらし氣象に注せて是ふる故胎後一定なきものや又能病を治する人ハ覚へざる事なれバ是にさる故ニ是を無為にしく是をまつふかく又病人変ありても験ハ薬の為るしるけれバときにハ病證変せされハ同じ事にて薬ハ紙用る故に後にあるしからバ是を効なしとてても一年も米なし是方と用る事を知る

Kitasato Memorial Medical Library

一 或問曰聖人の道を醫者ハ漢にて
絶たる事いかん
答曰聖人の道の絶たる事ハ孟子荀子
などより始る說論語に子貢曰夫子之
言性與天道不可得而聞也子貢さへ
聞く事なりしといへる事を荀子ハ性悪と
いひ孟子ハ性善といひ各其言ありて說出
せし故に氣の穿鑿をしたる性と天道



とは造化の事にして人のおしはかる所ならず
是を說故に絶たり聖人乃道絶たるや
聖人乃言は實事と務め身に行て後に
いひ給へる事なれバ性と天道とも理
にして心に得るものなれハ說べからず故に孔子も
罕にのたまひ子貢も得て聞べからずとぞ以
上聖人ハ道絶てより倶に陰陽五行を
もて理窟と云し也人扁鵲の書といへる難經
乃ち絶たる其余もあるにより陰陽醫者に成り

Kitasato Memorial Medical Library

さるばかり扁鵲なりとも造化の司ず
をいかで病家の形状と見定て病となり
病者は猶あやしと覚えんとするの故に歎
を得るといへども術にかけて堪ふる事聖
人も命ある内にかひなるすべ知らるといひ
身に治するすべ大いく知るるすみぞと知らぬ
ところに患いふ往の事かしを甚ふする
きことのなり

一 或問曰後世乃醫者ハ風(ふう)寒(かん)暑(しよ)湿(しつ)燥(さう)火乃



六氣に傷きらく病とせらるといふ疾醫
を傷らるゝする所としといふいかん
答曰風寒暑湿燥火を天の六氣にして
萬物生(せい)長(ちやう)収(しう)蔵(ざう)せしむる天乃正令(せいれい)なりあんぞ
天乃人を傷(やぶ)る理あらんや萬民これは
天に私(わたくし)なりいかんとなれハ天下萬民を
してことごとく六氣の内に生きしめ給ふ人
をやけましも傷(やぶ)ることあらしめさるなり
なんぞ天より災ひ罪(つみ)とするすべ

Kitasato Memorial Medical Library

んや万病又天乃寿とるなるハいかで薬もて
治せん能く考へし余古昔名醫の法
に随ひ療治して考ふるに六氣の病と
くるに治せる薬方あり唯扁鵲仲景
乃如く病毒に方と云ふ法ハ汗吐下和して
万病治と彼六氣に傷やられと云ふ人も至
毒と言附と寒風色に於ふと云人も傷至
さるいく知色し

一 或問曰風にあたつて風乃病を生し合拘



にあたりて頭痛し悚しくこゝ合拘ハ試
吐となれハ腹痛甚とまて及れハ合にも
外来乃邪気にて傷られ如しハいかゞ
答曰万人同し風にあたれとも傷られも
あり傷られぬもあり又同拘と合して
も食傷したる人もあり又ある人もあり甚
皆傷ふ為にあらね天乃氣に感して頭
中乃毒動きたりこの毒とあれハ風にあり
傷られ或ハ合にも傷れやすきといふ人

Kitasato Memorial Medical Library

何経に風邪ありても何と合してこそ傷る
病おこらずその邪り支食物にとゞまり
癇あり嫌ふ物ハ経中に毒ありて傷へ
傷ふなり是毒気存しれハ嫌ひし物を
忌ぶなり合せれハあらて経痛とする
事にて物もあるさ病なり是をもて風
も合せ傷る物よはるを経中に毒動て
氣ぼろハ志むるといふ事を知へし

一 或問曰内経ニ云ふ諸家ニては五臓の積ハ
從病医を唯一毒といふて五臓乃説を
取さるすいかん
答曰臓腑の事周礼管子抔みあれとも
後世にいふ五臓六腑丸事にあらす後世
にいふ五臓六腑乃事ハ漢にをり後漢医
盛なりて後の説なり内経抔ニ心積
脾積肝積腎積等丸事を詳に論し其
病を其業まて治とるみをいふ理を志
切共ゞ問中まとも今用中ゞに薬効を

Kitasato Memorial Medical Library

し経中より来る事ハ外より入をかして皆推
量する事也又臓の説をもてさるなり
一或問曰生死を知れといへるは醫術を学
用ひ死しては何の益なけれといふ着語
ありいかん
答曰生死をしらぬといふ事ハ病人畏る
答なり知れとも媚諛いひまけたるもな
し若しかけさるハ最れぬ事といへとも
又またしき事なれとも生死を先より



しらぬ事なしといふなり聖人も死
生命ありしものなく人死しての事にあ
らは是をしるも益なし知らんとする也人
療治に迷ふ事あり凡人間の大切とするハ
命なりされは生死の二ツ流決は何ぞ生ハ添
く死あり然れは人事変じて死
とるとも知をなれ人なりさる人と殊る
といふハ是にいふ事なれと殊に大切
の病人ありあり死てはとおりに為る

Kitasato Memorial Medical Library

時に心を惑乱して病説もみてと唯死せ
いふは目に見ゆる療治を施すあたはず惆然
たる事俗人はこと常る事生死を知ず
いふといへども実に生死を志らさる故なり
醫者は只病苦に惑ふのみにて生死を
天乃司所と治定しれハ迷ふ事なし
ま總して庸醫の必死ときわむる病人
の全快するもあるハ却て生死と志らぬ
といふ事醫者の要たる生死と知る



ねといふ事は以て自ら会得悟志るべし
此ふ覚悟せさるハ醫とハいひかたし古者扁
鵲過虢太子暴蹷而死するに扁鵲療
治して蘇りけれバ天下の人称美して
扁鵲為能生死人也といふ志かれとも扁鵲は
答へて越人非能生死人也此自當生
者越人能使之起耳といへりとも生死
ハ醫者のあつかる事にあらずと知べし余家に
京師祇園町に保養屋長兵衛といふ者を療治

Kitasato Memorial Medical Library

ありける身なりしか一ある病人泄瀉の症ありて世醫
治しかたくしたりしに則余をまねく往て見るに診
に心下痞鞕水瀉嘔逆してまさに絶んとす
余曰此方の療治を世上大ふ恐るゝなり其
故ハ今の醫乃あやまりよりほかに薬を
此方ふ用ひ病よ的中する時ハ大ふ瞑眩を
おこすも瞑眩ふ恐れて病治せぬものなり
といひけれバ病家の者合點して薬を乞ふ乃
生姜瀉心湯を三貼用ひけれバ其日七つ時ふ

大ふ吐瀉して病人氣絶をきふよりて家内
大ふ騒動し醫を集て診せしむれバ皆死し
たりといふ故ふ使を以て余を招く又
ゆきて是を診するに息絶呼吸絶たり家
内の者も死せりとおもふ死なる事に
見きハめる事ハ能はざることなりとも且死し
てよも断二時ハかりなり先靜まて以よく
死したる死さぬと見合へし薬ハあた
とはふ入ずして又ハ毎日のみかはらす

ゆりたることを夜九つ時分病人急死しけるなり
其見識知りたき一類眷属集りける所は何故そ
と問ふ一類の者もおどろきて只今ハ今日
七つ時分より只今まて呼吸息脈ともに絶て
て醫者と集りて是を見れとも死人に業なしと
いひて帰りたるは理もなく皆あきれ居る
といひけれは病人を娘して不思ひ居れ肉
太不深しよりこま後一向病者もなく寝と
るやうに見へたまゝや氣力をよく於ゆ



さる様子皆と帰へしたるといひたれとも一旋の
ものは帰りを折かひ出たる近所の
醫とき様子を診察せしむるに脉もとの
くなりと病者と言て帰りたる由いふ
病人言分と御何分帰ると一と言ふたれハ一旋
のものも帰りたることをおもひくまふ鍼をうへと
いふく葉漬三杯と含み於ひて寝翌朝
急く丈夫になり多年の病とも忘れたり此人
初年より含地めそら少へ白粥をくく喜び拝せ

らざる四十あまりにまでても皆すれ共治せん
ぶ症より病をうくる也今ふすあくいは去るまじ
右の病治して後いつと今いふて見あるる事ふ
く七十までも壮健ふ暮しぬりし病人を
宮細毒と見定て毒に方を設けて療治を
このみたへしより死ぬるも生るをえらず
て幸とあらんかくれかくおぼくなりてそれは
死なぬ者也人生るといふものあり俗説の
病人と語りても生死とえらぬといふ也





然るに人多し頼れとも生死とあらといふより
知らぬといふ療治ま効のある事をも医家ふへ
し然るに或老人金を諫むるすた足下
平日生死とえらぬといふる也人世にれ人大
ふ恐れる事といひて療治とえらう
あるくたのむ人も多く人をたすくる事も
多からんといひて己が心をかふ是と若人より致
と世ま顕さんとて塩切ぬとしへのふすまかく
しけすれすなれとも少しより生死は去るぬ



Kitasato Memorial Medical Library

ゆゑなりされバ人世に功ありといふとも從
もいはて長老の諫らるゝ事あれバ辭退も
なりかたくしてあるしく人の疾苦を救ひ
吾道と志世に行べく人になしけるよからん
ゆゑ年來の志願なれバこそ人醫術ゆかりまた
も餓死に及ぶとも道とは違へるれ古者
顏淵曰夫子之道至大故天下莫能容
雖然夫子推而行之不容何病不容然
後見君子夫道之不修也是吾醜也夫

道既已大修而不用是有國者之醜也
不容何病不容然後見君子と醫をも爲
務り二子年經る道と記しくゆふゆけれ
もさく人餓死に及ぶとも志道世に行きれば
吾生涯のなかまなり相修らゆるれ
ともかくれなくさんの太平のなれバいかんに死ぬよ
死ていとし辭しされバ彼老人憮然として之れ
見る志の後ともも道にあきらかなる人の好むもの
せんるも吾もしる所にあらんは生死のうけ明り

なりされハ醫術と申すものハいさゝかなる故なり
なんぞいひかけにもへだてんや云ふべからず
さるゆへハ病の治とるとまて急べし
一 或問曰太倉公ハ古昔の名醫にして史記
にも扁鵲とならべて称せり其太倉公の
生死を知る事ハ纔に先生生死を
わかつ事といへるハいかん
答曰太倉公ハ淳陽醫なり疾醫にあら
ざるゆへハ首章にてみるべし扁鵲ハ

疾醫なりこれ道後漢の張仲景に傳はり
仲景没して後絶て傳る者なし今の醫
者ハたゞ太倉公が流にて二千年
來の間一人も疾醫の道を好むものなし
此生死と論すれども實に生死と是らざる
從つて史記太倉公が傳に曰齊王問
太倉公名也
太倉公診病決死生能全無失乎臣意
對曰意治病人必先切其脈乃治
之敗逆者不可治其順者乃治之心不

精脈所期死生視可治時時失之臣意
不能全也とあれハ能知るといふ太倉
公の論しても尽くはしられす又生死を志りぬ
といふ余まても志らさる事也へ十ハ
七八ハ遠ふ事なし然れハ知るといふ太倉公
も志らぬといふ余も同しき事也然れとも
いふかく死生ハ造化の司なく人間の論
し知つへき理なし当生死を志るといふハ
倉公も実ハ志らさる事なりといふ言葉
ふかく明なり

一
或問曰古方を信する人ハ後世の医者
を用ひる後世の医者を信する人ハ古
方を恐れて用ひす又古方の療治を更
ても後世をする人ハ甚恐るる事甚し
いかん
答曰瞑眩すれハ恐るへき事なれとも
其ゆへの後死すと知る人ハ変を
用ひ病毒去るまて服用する也人ハ後

今惟し瞑眩せさるハ病乃治せぬといふ事
を能知りたれ也人後世乃業と用ひ
居たる程なりし又後世の醫を信じ
たる人乃目ニは古方の療治甚あらく見ゆ
る由へ人用ひぬものなり又古方乃
療治術ゑく怯氣なる人ハ怯恐るると
いへるも療治ニ誤りて成遂ざる人なり
是ハいまた用ひさる人より甚しく恐れ苦
なり業功のあるも時を必瞑眩して不死

なんとおもふ故ニ若しかりあつまされとも業
なく屬する事也人二時斗是れハ藥氣を
て發れさるハるかくして後かくなりて
大ニ病毒滅したるものなりとを根子と云ハ
瞑眩しまし時發して纔用醫者と制し不瘉
補剤と用ひられハ時乃多ニ怯氣となる故とて
よめり療治みく死なんと志ける不補業
と與へ命を捨る事に成りて益古方
を恐れ多くなりし甚しく是補業

もて治しうるにあらねバあれ薬氣つよく
快く覚するなりとも古方と信ぜねバ又
不用いせんよりハ甚恐るべき事と思ふべし

一或問曰後世の醫に用ゆる病毒とハ如何
ものなりといふ當家にてハ悉く毒を以
ていふか

答曰病毒とハ生れて後生じたるもの也
毒薬にて取去るべきものなり是從櫻ハ
大病を療治して快覚の後病ひおこる須



又おだやかなる薬にて氣を補ひ體を養ふ
といふ醫者ハ大毒の薬を恐て用ざる故
毒取去る事能ずして後ハ療治ならず
病の治せざる事あり是ハ實に治しうる病に
あらず自然と毒乃解りて快覚するところあり
是從櫻よりハ又生じておこるところ毒ごとく
去らねバともいふ那り療醫ハ悉く去
るを知れ甚人言て癸るをかれし

一或問曰老人小兒又ハ疲（つかれ）たる病人ハ

瞑眩と用る事いへん
答曰死生ハもとより了解せバ又術の手
に入ぬ人を云なしかくて死すなり死生の
事は了解する人をたとへいへバいつ
まで生る老人小児にても此病を此薬にて
治さるといふ事を始と心に覚へざる故
にはしき薬と用ゆ又了解せざる人を
薬毒に堪えずして死ぬる事もあらんと
惑心ありて薬と用る事ハいくさるもの也

に死ざる病人をいへり凡毒薬と用ひるく
ハ病毒動ざるゆへ瞑眩せバ瞑眩ニ是ハ病
毒滅ざるゆへなをひ命数つく死するも
病者ともやかれやもうに死するものなり
又薬ハ體と嘗ふそのふあれハ腹中凡毒
と頭ゑのなり腹中よ毒あれハ食すゝま
ざるゆへよ羸痩すりこを毒と頭ハ合す
みく難ハ嘗ひよまふなる事り続ハ苦ふ
痩たる後人さる人を大ふ毒ある不也いよく

薬ハ殊にけしく用ゆへし殊に老人小児は
変ある事なれバ尤よのなりことさら病毒盛
なる時ハ病毒に壊して変ある事あり然れ
ども人用ふ死湯不とてもかりてハ又用ひかたし
必恐るべしんさく人今も死る事にんゆる病
人にくもこと毒に徹ある毒薬と用ゆれハ亦
汗し或を吐し或ハ下りて薬の効ちあら去く
にさ従ふく治るものなり彼傷寒論ニ
強人一銭匕羸人ハ半銭匕といふハ強人



乃撰入なり惑ふ逆らへ侯
一或問曰彼大毒の薬と用ひ忽ち死る者
ものあり然れどもも薬にて死したるよ
あらざるか
答曰薬にて死したるにあらず死ぬ可き
時に至りて死するといふものなりことさら
死ぬるものハ薬毒にあたりてはいかにも死ぬもの
なり又薬毒よあたり瞑眩も吐深ある程
勢なるハ腹中に毒盛なる人なれ

扁鵲といふともいかんともする事なし唯從ふ
隨ひ薬餌與へ天命を待のみ

一　或問曰毒薬多く死するものしと云ふ説は
古昔より毒殺といふ事あり故に河
豚魚の類ハ獣名而魚毒何之神毒毒
于毒不毒于人と本文にいへり
答曰薬とのみいふは後世の事なり古書
には毒とありいましく薬とかいふる
事と覚ゆ周禮曰聚毒薬供醫事素問





曰毒薬攻邪又曰攻病以毒薬養精以
穀肉菓菜とあるは甚毒薬と人ハ懼るゝ
ものゝ見ゑ知ぬ人を怨し答むり其薬の
責を帰ともして貴しとれ共毒殺と云
薬にて死する時ハ薬といふものなくするや
又病と治る薬方と用ゆるハ人の病其様
軽ふなかりし薬を何し毒薬なりとて
唯薬方の合ひを違ひなり能きとすと如
する人ハ毒薬と用ゐること事なし

しらぬ人をば悪るきといひつたへる英雄豪
傑なりとも知らざるには批判もなし又一文
不知の人なりとも根本をよくしりたるには
をさんまんするにすれし吾業の毒薬と用
ゆるも亦能りしき毒薬にて此病ハ治すれ
といふことを知らざるなかれも思ひてすなはち纔
往々大毒と用ひるくも其病治して却て
害はなれるなり

醫事或問巻上終

Kitasato Memorial Medical Library

Kitasato Memorial Medical Library

Kitasato Memorial Medical Library